

看護における「個別性」の探求：当事者のニーズに応える専門性 個別のオーダーに対応する専門性； APNの実践から

著者	岩佐 有華，大久保 暢子
雑誌名	聖路加看護学会誌
巻	26
ページ	48-48
発行年	2023-01-31
URL	http://doi.org/10.34414/00016705



看護における「個別性」の探求：当事者のニーズに応える専門性 個別のオーダーに対応する専門性 ——APNの実践から——

座長：岩佐 有華¹⁾，大久保暢子²⁾

近年、医療の高度化・複雑化，少子高齢化に伴う社会構造の変化，人々の生活の質の多様化などを背景に患者やその家族の医療に対するニーズは多様化・複雑化している。このようななかで，患者や家族が抱える個別のニーズを包括的にとらえ，「患者中心の医療」を実現するため，エビデンスに基づく看護ケアの推進者として，高度実践看護師（advanced practice nurse；APN）の役割は大きい（小松，2014）。

本シンポジウムでは，個別性のある看護実践のロールモデルとしてのAPNの実践から，医療が変わりゆくなかで看護が探求すべき「個別性」について深く考える機会とするため，「看護における『個別性』の探求：当事者のニーズに応える専門性 個別のオーダーに対応する専門性：APNの実践から」をテーマとした。APNである3人のシンポジストより，当事者のニーズに応える専門性や個別オーダーに対応する専門性について，日ごろの実践経験に基づき報告がなされた。

摂食嚥下障害認定看護師，慢性看護専門看護師である杉山理恵氏（日本医科大学付属病院）からは，「その人らしい『口から食べる』を実現するために」といったテーマで，安全な食事に関するケアの質の向上を目指したスペシャリストとしての包括的なアセスメント，卓越した直接的・間接的实践，多職種との調整，組織としてケア実践を行うための組織づくりなどについて語られた。

母性看護専門看護師である長坂圭子氏（西武文理大学）からは，「安心」をキーワードにした女性・母子・家族へのケア実践について，未来逆転的思考（バックキャストイング）の実際，APNが行う1人ひとりへの直接的ケアを組織的に提供できるようにしたシステム構築の実際，エビデンス蓄積や知識共有のための研究活動の実際などについて，4例の具体的なケア実践に焦点を当てた報告がなされた。

造血幹細胞移植ナースプラクティショナー（nurse

practitioner；NP）である鈴木美穂氏（慶応義塾大学）からは，看護と医学の両方の特質を合わせ持つニューヨークでのNP概要，NPの実践経験に基づいた医療モデルと看護過程を適用した一貫性のある質の高い患者ケア，診療報酬などについて説明がなされた。

各報告の後，APNとしての個別性の探求，当事者のニーズに応える専門性，個別のオーダーに対応する専門性，コストパフォーマンスなどについて以下のディスカッションがなされた。

ガイドラインやマニュアルといったエビデンスを活用しながらも，患者を包括的にとらえるとともに，患者1人ひとりの声に耳を傾け，ケアを提供するタイミングを慎重に見極めることによって当事者のニーズに応えたタイムリーな個別の看護実践が可能となる。

また，APNは直接的ケアを提供するだけでなく，ロールモデルとして1人ひとりの個別性を探求しケア実践すること，その実践がシステムとなるように連携・調整を行っていくことが重要である。APNによるケア実践の費用対効果は，患者に安心・安全なケアを提供することが病院の信頼性を高めること，付加価値を高めることにつながり，病院全体の利益となる可能性があると考えられる。さらにAPNによるケア実践の対価（診療報酬）を要求できるようにするためにも，研究として実践のアウトカムをデータとしてまとめ，政策者に届けていくことが重要である。

以上，本シンポジウムは録画による配信となったが，各シンポジストの報告ならびに活発なディスカッションによって本テーマに関する討論が十分なされた内容であったといえる。

引用文献

小松浩子（2014）：我が国における高度実践看護師（専門看護師）制度・教育の変遷と課題。学術の動向，19（9）：54-59。

1) 新潟大学医学部保健学科

2) 聖路加国際大学